

『東谷御林人參一卷』と松平君山

安 江 政 一

『東谷御林人參一卷』(以下『一卷』と略す)は江戸時代の中期、尾張藩において朝鮮人參を栽培した時、人參掛役人が作ったところの実施記録である。これは上司への報告書でもなく、世人に伝えようという目的の文書でもなく、担当者達自身のための覚書であったと思われる。それ故、上部からの指令を受けて予定を記した後、改めてその実行を記載するという重複が所々に見られる。この文書は役所には置かれず、人參掛役人の家、松本家に所蔵されたまま百数十年埋れていた。昭和五年、本草研究家右左見直八が発見して「菅草」八号に紹介した。江戸時代における薬学研究上の最大の成果は朝鮮人參の国産であるが、それについての初期のくわしい記録は皆無に近いので、右左見の発見は注目され、『日本薬園史の研究』にはその全文が転載された。文中一個所だけ中略と記してあるので、何を略した

かを知るため古文書の全文を調べた。『一卷』は半紙縦折の大福帳型、八十頁に及ぶ長いもので、右左見の紹介は抄録であった。内容は役所関係者の出役者氏名、開墾のこゝと、垣根や日覆の製作とその材料集め、出役人足の人数と労賃、風水害と修繕、鼠害と対策、人參実の蒔付と移植、芽出し調べなど、その日その日の作業記録である。以下主としてこの文書と栽培指導者松平君山との関係について述べる。

君山はこの栽培の開始より前に、既に自ら管理する植物園において珍草奇木と共に朝鮮人參も栽培し、生薬も作って藩主に献上していた。またこれより先、日光における幕府主導の人參の農業的大量生産も成功していた。ほかに蒼朮は佐渡で、甘草と黄芩は甲州で栽培されていた。享保初期に甘草の存在が幕府に知られ、その標本は尾張藩へも届けられていた。このように一般の薬用植物は難なく栽培、増殖できたのである。人參も早くから生根が輸入され、結果をみるところまでゆきながら苗の増殖ができなかったのは、種子の特殊性と初生苗の耐寒性の弱さにあった。(安江、薬史学雑誌一七卷一号参照)、『一卷』によると、君山は

三回にわたって幕府から分与された七万八千粒の人参実を用いて四千本の苗を得た。蒔付後七年を経て、生薬に作り得るまでに成長した人参は数十本という結果になり、さらに減少する傾向を示すので東谷御林からすべての人参を名古屋の薬園に引き揚げて、大量栽培は中止となった。君山はこの失敗の原因を土質不適合としているが当たっている。

人参は水はけがよくて乾燥ににくい、という条件を要求する。このような土、すなわち腐植質を多量に含む土を作ることが人参栽培の秘訣である。こういう土に植えるからこそ施肥の必要もないのであるが、君山は最初から肥料不要として栽培を指導していた。

君山は儒学者であり、歴史、地誌について多くの編纂を行い、一方では文学者としても多くの漢詩を残している。藩命によって領内を視察し、その都度作詩したが、自然の観察も怠らなかつた。彼は、当時博物学的傾向を強めていた本草学を、基礎的教養として学習していたのである。この自然観察の成果が『本草正諸』として結晶した。具原益軒、松岡恕庵ら専門的本草学者の所説を批判するもので、実地観察の裏付があるからの射ているが、当時の水準か

らみて深い研究とはいえない。刊行の翌年山岡恭安の『本草正々謁』が出され、更に君山の門弟杉山維敬は『本草正々謁刊誤』を出して恭安に一矢を報いているが、これらの経過と『一卷』の内容からわかることは、君山は専門の本草学者ではなく、偉大なる儒学者であつたというべきで、『本草正謁』は彼の幅広く高い教養の一端を示すにすぎないというべきである。

(新潟薬科大学名誉教授)